

日本原子力産業協会は、米国との原子力協力協定が実現後に開催されたインド原子力学会第19回年次大会(2008年11月24-26日、於ムンバイ市)にインド側からの招聘を受け使節団を派遣した。同使節団団長の

服部拓也原産協会理事長と関本博東京工業大学教授に大会後に訪れた高速増殖原型炉の建設状況を含め印象を聞いた。

(聞き手：中村 悦二 本誌編集長)

東京工業大学 関本 博 教授

—大会の印象は。

関本 日本の原産大会のようだった。学会といっても、インド原子力発電公社の人が多く、大学の貢献が余り見られなかった。私は現在考えられている原子炉とはかなり異ったキャンドル炉について話したが、沢山の質問を受けた。

一方、会場での企業の展示は多岐にわたり、独自開発を反映しそれなりに充実していた。

—米国との協定実現後を感じさせる動きはあったのでしょうか。

関本 講演をしたのは日本とフランスだけ。講演・発表はしなかったが、韓国からは集団で来ていた。日本の使節団には、三菱重工業、東芝、日立GEニュークリア・エナジーから関係者が参加、伊藤忠からも参加があった。その意味で、日本のプレゼンスは大きく、インド側の日本に対する期待も大きかったと思うが、具体的なことは知らない。

—今回のメインはチェンナイ近郊のカルパッカム原子力発電所視察だったのでしょうか。

関本 学会ではレビュー的な発表が多かったのも、インドの原子力開発計画が整理されて頭に入り、それはそれで役立った。チェンナイでは原子炉の運転、建設の現場をみることができ、相互補完的だった。学会では、インドはユニークな形で原子力開発をしていることがわかり、カルパッカムでは日本とは違った環境での建設・管理の仕方とか、インド式重水炉の現場を見ることができた。

高速増殖炉に関しては、建設現場の隣で大型構造物



をつくっている。インディラ・ガンディ原子力研究センターもここにあり、原子力開発のコンプレックスになっている。1ヵ所で集中的に国家プロジェクトを進めており、「自分たちが原子力開発を担っている」という気持ちを感じた。

—高速増殖炉の開発にはどんな印象を。

関本 重水炉→高速増殖炉→トリウム利用の重水炉開発というインドの3段階の原子力開発については、学会の場できっちりとした形で出され、バーバー博士の決めた方針の堅持が示された。高速炉については、2010年のコミッションを目指して、PFBR(500MWe)の建設が順調に進んでいる。これからが大変であろうが、力強さを感じた。軽水炉は、現在の急激なエネルギー消費の増大で当面の方策として導入すると説明された。

—人的なインフラは相当整っているのでしょうか。

関本 具体的には聞いていないが、人的なインフラはあるようだ。大学には原子力学科というのはないが、研究所で学位が取得できる、といていた。

—研究協力の話は出ましたでしょうか。

関本 旧知の教授と、個人レベルでの研究・教育に関する話をしたが、大学レベルの話はなかった。